

インドの説話「心臓と耳がないロバ」とイソップ風寓話「心臓がない鹿」

——特に『カター・サリット・サーガラ』KSS.63章 125-150節と

バブリオス Babrios 95番の韻律について——

A Comparison of the Indian tale 'The ass without a heart and ears' and the Aesopian-style fable 'The stag without a heart'

兵頭俊樹

Toshiki HYODO

(和歌山大学クロスカル教育機構)

2017年8月8日受理

The Indian tale 'The ass without a heart and ears' and the Aesopian-style Greek fable 'The stag without a heart' are considered to have a common origin. In the first half of this article we summarize the research of T.Benfey, J.Hertel and F.Edgerton about the Indian tale. In the second half we compare the Indian story of the ass in "Kathasaritsagara" and the Greek fable of the stag by the poet Babrios. By comparing the prosodic structure of these two tales, a common pattern of long and short syllables - v - v - - - (- = long, v = short) becomes apparent.

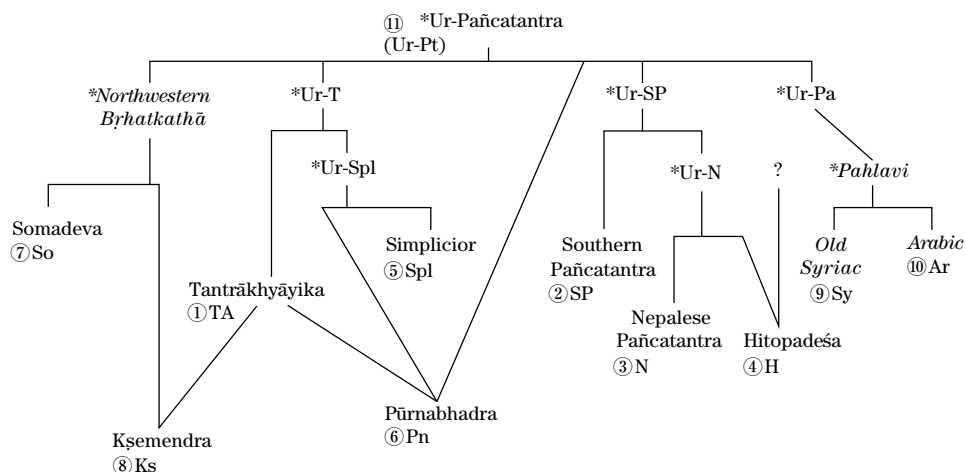
はじめに

インドの「心臓と耳がないロバ」とギリシアの「心臓がない鹿」の話は、遅くとも2、3世紀ころにはすでに成立し、口承の伝統はさらに何世紀も遡ると考えられる。正しい判断ができない愚かさを心臓のない動物の寓話で表現したものであるが、この話がそれぞれの国で個別に生まれたとは考えにくいとされる。早くから、インドかギリシアかどちらが発祥の地であるかに関する論争が行われ、それぞれの説に有力な支持者が現れた。インドの話は説話集『パンチャタントラ』に収められ、ギリシアの話は『イソップ風寓話』として伝わる。『パンチャタントラ』の学術的研究の基礎は、ベンファイの名著『パンチャタントラ』(1859)によって確立され、説話・寓話の比較文学研究に新時代が始まる。次いでヘルテルはこの説話集の重要な伝本を発見・出版・翻訳するとともに詳細な研究を発表し、その文献学的研究に不朽の功績を残した。さらにこれらの成果の上に立ちエジャトン、諸伝本の内容を比較検討し、綿密な考慮のもとに『パンチャタントラ』の原型の復元を試みた。¹

本稿は前半で「心臓と耳がないロバ」の寓話に関してこの三人の研究の跡をたどり、後半でインドとギリシアの韻文バージョンの訳と韻律の比較を試みる。

『パンチャタントラ』の系譜

TABLE
SHOWING INTERRELATIONS OF OLDER PANCHATANTRA VERSIONS



* Indicates hypothetical versions. *Italics* indicate translations into other languages than Sanskrit.

表はエジャトンによる系譜に便宜上丸付き数字を加えてタイトルを略記した。² 数字の順は同書190頁の表に従う。本稿の本文中の丸付き数字はこれに対応。以下に①から⑩の各版の概略を記し、各版の「心臓と耳がないロバ」の特に最後の部分を可能な範囲で比較参照のために引用する。³

- ①「タントラ・アーキアーイカ」(TA. or Tkh.) はヘルテルによって発見され、出版・翻訳され(1909-1910)「パンチャタントラ」の原本に最も近いとされる。3世紀頃。本稿Ⅱ章参照。
- ②「南インド本」(SP.) は少なくとも5種の副伝本があり、原本のすべての挿話を含むと考えられている。ベンファイの言及は本稿Ⅰ章参照(デュボアによる仏訳はタミル語の伝本に基づく)。「南インド本」の全貌の解明はヘルテルに帰せられる。
- ③「ネパール本」(N. or Nep.) 詩節のみを集めたもので、「南インド本」の副伝本の一つに含まれる詩節のほとんどすべてを取める。「心臓と耳がないロバ」の話は含まれない。⁴
- ④「ヒトーパーデーシャ」(H. or Hit.) 作者ナーラーヤナは「パンチャタントラ」5巻を4巻に改編し17編の挿話を加える。成立は900-950年頃。邦訳は岩波文庫1968年。「心臓と耳がないロバ」の話は含まれない。
- ⑤「小本 textus simplicior」(Spl.) 「タントラ・アーキアーイカ」が発見されるまでは「パンチャタントラ」の代表とみなされていた。成立は9世紀半ばから11世紀。「タントラ・アーキアーイカ」より30話多い。各巻の分量の平均化がみられ、詩節が著しく増加。ロバの話の最後の部分の邦訳は以下のとおり。

ところがジャッカルはガツガツしていたので、驢馬の耳と心臓を食べてしまった。この間、ライオンは沐浴し、神々を拝み祖霊の群れを満足させていたが、もどってみると驢馬の耳と心臓が無くなっているの[を]見て、怒り心頭に発してジャッカルに言った。(…)ライオンは彼の言葉を聞いて信用し、驢馬を彼と分かちあって、心ゆくまで食べたことだ。⁵

- ⑥「広本 textus ornatior」(Pn) プールナバドラにより1199年に成立。ほかの伝本にない21話を含み著しく拡大されている。ロバの話の最後の部分のRajanによる英訳は以下のとおり。

The jackal, overcome by intense craving for food, ate up the donkey's ears and heart. When the lion returned after completing his bath, and all the prescribed rituals following it, he noticed that both ears and the heart of the ass were missing. (….) Flaming Mane being mollified by Dusty's words, believed them to be true. He divided the carcass with the jackal and ate his own portion.⁶

- ⑦亡失した大説話集「ブリハット・カター」の流れをくむ「カター・サリット・サーガラ」(So. or KSS.) に取り入れられた「パンチャタントラ」。11世紀カシミール地方の詩人ソーマデーヴァによる説話集。第63章125 - 150連が「心臓と耳がないロバ」の話。本稿Ⅳ章参照。
- ⑧「ブリハット・カター・マンジャリー」作者はクシェーメンドラ(Ks)で「ブリハット・カター」を圧縮するに急なため、時に意味の理解を妨げる嫌いがあるという。
- ⑨中期ペルシア語のパラヴィー語訳を経て古代シリア語(Sy.)に訳されたもの。570年頃と年代は古い。ロバの話の最後の部分のSchulthessによる独訳は以下のとおり。

Darauf sprach er zum Schakal: „Gib zu dem Esel acht, ich will gehen und mich waschen und wieder kommen, denn so lautet das Heilrezept, daß der Kranke Herz und Ohren verzehre und den übrigen Leib Gott zum Opfer darbringe.“ So ging der Löwe, der Schakal aber fraß das Herz und die Ohren des Esels, damit er, wenn er ihn sehe, es für ein böses Omen halte und nicht von ihm fresse.⁷

- ⑩同じくパラヴィー語訳を経て750年頃イブヌル・ムカッファイによりアラビア語(Ar.)に訳されたもの。「パンチャタントラ」第1巻に登場するジャッカルの名を取ってタイトルは「カリーラとディムナ」に。ロバの話の最後の部分の邦訳は以下のとおり。

ライオンは山犬に言った。「この薬の使用法は、次のように定められている。まず沐浴してから両耳と心臓を食ひ、残りを供物として神に捧げなければならない。したがって、沐浴して戻ってくるまで、驢馬の番をしてくれ」ライオンが出て行くと、山犬は驢馬から両耳と心臓を取って食べた。そうして置けば、ライオンは不吉なものを感じて、残りの肉には手をつけないだろうと考えたからだ。⁸

- ⑪「原パンチャタントラ」(Ur-Pt.) エジャトンが諸伝本を比較検討し綿密な考慮のもとに復元を試みたもの。ロバの話の最後の部分のエジャトン自身による英訳は以下のとおり。確信をもって原形に帰することができないとする箇

所をエジャトンに括弧にいれている。

(Then after he had killed him) the lion said: “ (Friend,) the rule for applying the remedy is this, that it is applied after worship of the gods and other rites. (Only then does it have its effect.) Wherefore do you (stay here quietly and) watch until I have bathed and performed the daily sacred rites and come back.”⁹

I ベンファイの『パンチャタントラ』

この研究書が出てすでに1世紀半が過ぎている。この書で引用される校訂本が今日では新しいものにとって代わられたり、新たな説が確立されていたりする箇所も少なからずあると考えられるが、この書がひげ文字ドイツ語で印刷されていて馴染みにくいということもあり、また当時の研究の様子も窺えるかとも思えるので、「心臓と耳のないロバ」の話の「序説」の主要部分をほぼそのまま訳出する。¹⁰ ベンファイの以下の記述には、上掲のエジャトンに基く表の丸つき数字を加えたが、これは便宜的なものである。なお[]内は訳出上の補い。

§.181 サンスクリット版⑤の写本はほぼ一致を見ている。南インド本パンチャタントラ（デュボアによる仏訳）②が特にこれらと異なっているのは、ライオンが初めから自分の病気の治療のために「ロバの心臓と耳」を要求していることである。これはアラビア語版 [= 『カリラとデムナ』]^⑩も同様である。サンスクリット版⑤の諸写本では、ライオンは象から受けた傷がもとで床に臥せっていて——この点では I ,11 [「獅子と鴉と虎とジャッカルと駱駝」の挿話]及び I ,16 [「狡猾なジャッカル」の挿話]と一致し、これらの挿話からの影響があるのは疑いない。§.78 [I ,11 の解釈箇所]を参照) ——はじめから心臓と耳が欲しいというのではなく、後になって心臓と耳がないのに気づくだけである。このような心臓への執着が印欧語を話していた人々の精神と関係があるのかどうかは(cf. グリム「ドイツ神話学」XXXVI, KM., Nr.81, III, 131 および上記 §.175) 私には判断できない。ライオンが冒頭でこのような要求をすることで、この話は全体的に練りあげられたものとなる。構成が稚拙なものほど古いバージョンだとする原則に従うとすれば、この点においてサンスクリット版⑤は南インド本②やアラビア語改作版⑩よりも古いということになるだろう。私はこの原則が無条件に正しいとは決して思わないが、後述するこの話の原典によって、ここではこの原則の正しさが認められる。

その前にしかし違っているもう一つの点について述べておかねばならない。南インド本②で、狐はロバを説得するのに——アラビア語版⑩やサンスクリット版⑤とは違って——ロバの好色さに訴えるのではない。とてもありえないことのように思われるのではあるが、狐はロバにライオンとの友好関係を取り持ってやろうとしているのだと思わせようとする。先ほどの原則に従えば、我々はこの単純素朴な叙述もまたより古いもので、ロバの好色さをモチーフとする叙述をより新しいものだとしなければならぬ。そしてこの仮説もまたこの寓話の原典によってその正しさが証明される。

その前に第三の相違点を手短かに付け加えておかねばならないが、ここでは先の原則は通用しない。南インド本②では、ライオンが実際に心臓と耳を食ってしまい、その結果この寓話の落ちともいべき部分がなくなってしまう。ここで話を改変した語り手はこの重要性を見落としてしまったのかもしれない。あるいはこの寓話はロバの愚かさを語るだけでもう充分なのだと考えたのである——この語り手の改変のさまを考慮すれば仕方のないことではあるが。

この寓話の原典は、すでに Weber (「インド研究」 III, 338) が指摘しているように、バブリオス 95 番のよく知られた話である。ここでライオンは病気で臥せっていて、自分の餌食を探すことだけが問題になっている。狐がある動物を二度ライオンのところへ誘き寄せることに成功する。狐はその心臓を食い、ライオンには例の機知に富んだ答えを返す。ここまではだいたいサンスクリットのテキストと一致する。異なるのは、ギリシアでは誘き寄せられる動物が鹿であるのに対し、インドではロバである点である。インドの語り手は、鹿はあまりに賢くこの役割を演じるのは似合わないと感じ、愚かなロバのほうがふさわしいと思えたのであろう。ロバは耳が目立つ動物なので、心臓に加えて耳も話につけ加えられた。これにより狐の機知がいつそう輝きを増すことになる。耳を持たぬ者は、他人の意見を聞いてもその是非を判断できず、分別のある行動をとることができない。そういう意味が込められることになる。ギリシアの寓話では、狐が鹿に、病気のライオンが鹿を後継者に選ぼうとしていると思わせることで、鹿は誘き寄せられる。また狐が二度目に鹿を説得しようとする時には、ライオンは鹿に大事なことを打ち明けようと思い注意を喚起しようと耳を引っ張ったのだと言う。このような芝居がロバを相手になされるとしたらお門違い

というべきであるが、しかし南インド本②において、特に二度目の誘惑の場面で、ほとんどこれと同じ場面が展開する。比較的大きな違いといえば、王の後継ではなく王の友情とそれによる恩恵が持ち出されている点だけである。王の後継者としてのロバというのはもちろんあまりに馬鹿げていると思われたのである。次の段階に至ってようやくロバが——その生来の気質にふさわしく——自身の好色性のために誘き寄せられる構図ができあがった。見直しのいずれかの段階で、最後の彫琢が加えられ、話の初めにライオンが心臓と耳を要求するようになった。そしてこれが南インド本②に見られる比較的古い姿へ受け継がれていったのである。

II ヘルテルが発見した『タントラ・アーキアーイカ』①

以下の訳文中で (A) ~ (C) は、次章Ⅲでエジャトンの復元形と比較する箇所である。**はヘルテルが欠落としている箇所。

ある森の一角に、一匹のジャッカルを従えたライオンが住んでいた。ある時ライオンは難病に罹り、自分では何もできなくなってしまった。飢えて喉元がやせ細ったジャッカルはライオンに言った。「私たちの日々の糧はどのように。」ライオンは答えた。「友よ、この病はロバの耳と心臓を薬としなければ治らない。ほかに方法は無い。」「私がロバを連れてきましょう」とジャッカルは言うと、洗濯屋のロバのところへ行って話しかけた。「そんなに痩せてどうしたのです」ロバは答えた。「洗濯物が重すぎるのです。それに食べる物も毎日もらえない。ひどい主人です。」「なぜまたこのような苦しみを。さあ、私があなを天国ようなところへお連れしましょう。」「いま何と、どんなところだと?」「あそこの木立ちのところに、若さではちきれそうな雌のロバが4匹もいます。誰も見たこともないほど綺麗で、文句のつけようもありません。あなたと同じ苦役から逃げてきたのです。あなたを彼女たちの所へ連れて行ってあげましょう。」これを聞いて「是非とも」と答えた愚かなロバが連れていかれたのはライオンのところだった。ロバが射程距離に入ると、ライオンはロバに躍りかかった。だが喜びのあまりに我を忘れロバの頭上をかすめただけ。ロバは、この稲妻のようなものは何だと思いつつも、どうにかライオンから身をかかわすと、後ろを振り返りもせず、恐怖で心臓をどきどきさせながら、仲間のロバのところへ戻っていった。

一方ライオンはジャッカルになじられていた。「あなたがこの世界を動かしているですって? 俺さまはライオンだ。俺にかなう奴はいない。どんな動物でも仕留めることができるですって? 私が連れてきたロバさえ仕留めることができないではありませんか。そんなあなたがどうしてライバルの動物たちに太刀打ちできるでしょう。」ライオンは答えた。「うむ、確かに。もう一度だけ連れて来てくれ。今度こそ奴を仕留めてみせよう。」「準備万端ととのえて下さい。ロバはあなたの凄腕を知ってしまいました。けれども私がどうにか知恵を絞って連れてきます。先ほどのようなことにならないよう、うまくやってくださいよ。」ジャッカルはそう笑いながら出かけて行った。

さて、ジャッカルはロバのところへやって来てこう言った。「なぜあなたは逃げて帰ってしまったのです。」「たいへんな目にあつたのです。正体は分かりません。山の頂のような形の生き物が襲ってきたのです。間一髪のところで命拾いをしましたが。」するとジャッカルは言った。「ご存知ではありませんか。この世で信仰と金と女とを追い求める者はありもしない妄想にとりつかれるものだ。」(A) ロバは言った。「私もそれは聞いたことがありますが、しかしこれまでこのようなことは*****あなたよりも先に行きます。こうしてロバは無理やり連れていかれ殺された。

ライオンはジャッカルに言った。「よいか、この薬の服用は、神に祈りを捧げるなどした後でなければならぬ。効き目はそうすることで現れるのだ。だからお前は (B) 私が***終えて帰ってくるまでしっかり見張っている。」ライオンが行ってしまうと、(C) ジャッカルは心のなかで考えた。「ライオンを命と頼むのもどうしたものかな。だが、かといって永遠の友というわけにもいかないだろう。さて、さて、どのようにしてロバをわがものとしようか。」やがてジャッカルは四方の神々に祈りを捧げ、「どうか薬の服用に差し障りが生じませんように」と心の中で祈りつつ、ロバの両耳と心臓の服用におよんだのである。これを平らげて、口と手を丁寧になぐり待っているとライオンが戻って来た。ライオンはロバを右手にして儀礼どおりにその周りをまわったが、心臓と耳が見当たらなかった。「これはどうしたことだ。おい、耳と心臓はどこだ。」ジャッカルは答えた。「いったいどこに奴の耳と心臓があると言うんです? このロバはいったん逃げて帰ったのに、舞い戻って来たのですよ。」

Ⅲ エジャトンが復元した『原パンチャタントラ』⑪

前章で扱った「タントラ・アーキアーイカ」①を基礎に諸伝本②～⑩の内容を比較検討し、綿密な考慮のもとにパンチャタントラの原型 (Ur-Pt.) ⑪の復元したと言われるエジャトンの作業の様子を「心臓と耳がないロバ」の話のなかの3か所に絞って再現する。ヘルテルのテキストで欠落ないし破損箇所を含む (A) と (B) に相当する箇所を補い、(C) の比較的長いジャッカル的心中を描写した箇所についてはエジャトンは原型にはなかったと考えている。

(A)

① ロバは言った。「私も聞いたことがあります。しかしこれまでこのようなことは*****
**あなたよりも先に行きます。

⑪ 「あの雌ロバは激しい衝動にかられ、あなたを見て我慢できずに抱きつこうとしたのです。ところがあなたは臆病なものだから身をかかわした。雌ロバはしかしあなたなしではいられず、逃げようとしたあなたを引き留めようと腕を伸ばしたのです。それ以外には考えられません。さあ、戻ってきなさい。」これを聞いてロバは言った。「あなたと一緒にいきます。」

ヘルテルのテキストで (A) の「ロバは言った」で始まる部分の前には明らかに欠落があるとエジャトンは述べている。他のテキストがここに再び雌ロバの話を含んでいるからで、それが上のエジャトンのテキストに取り入れられている。エジャトンの復元はほぼ②～⑩を総合したものであるが、サンスクリットのテキストでは②⑤⑥⑦⑧を比べたうえで、この箇所では特に Pñ ⑥に拠っている。その最後の部分の「あなたと一緒にいきます」はロバの言葉である。これに対応するのはヘルテルのテキストで「あなたよりも先に行きます」であると思われるが、こちらはおそらく一欠落部分で話し手が変わって——ジャッカルの言葉であろう。エジャトンはさらに、シリア語旧訳をドイツ語訳により、アラビア語訳を英訳により（いずれもタイトルとしては『カーラとデムナ』）引用する。Sy 80.12 ⑨「俺は言ったじゃないか。お前がまだ見たこともないような雌ロバに会わせてやると。その雌ロバがお前を抱擁しようとしたのだ。だからもう少しじっとしていたら、お前のものになったのに。」Ar 68 ⑩「お前に跳びかかって来たのは俺が話してた雌ロバだったんだ。きっとあんなにお前は会ったことないぞ。お前に跳びついたのはただ欲望が強すぎたせいだ。」

(B)

① 「私が****を終えて帰ってくるまで」 yāvad ahaṁ **** paryāptim kṛtvāgacchāmi

⑪ 「私が沐浴して勤行を終えて戻ってくるまで」 yāvad ahaṁ snātvā nityakarma kṛtvā 'gacchāmi

ライオンがジャッカルに、自分はこれからしなければならぬことがあるから、その間しっかりロバの尻を見張っておけと命じる言葉である。ヘルテルはここで欠文を想定してアスタリスク (****) にしている。エジャトンはその必要はないとする一方で、⑤⑥⑦⑧⑨⑩に共通する「沐浴する」という語を採り、その共通する語幹については確実な部分として正字体（ローマン体）を用い、絶対詞接尾辞についてはやや確実度は下がるとしてイタリックを用いている。また「勤行」という語を②から採りイタリックとする。

(C)

① ジャッカルは心のなかで考えた。「ライオンを命と頼むのもどうしたものか。かといって〈永遠の友達〉というのも無理な相談だ。さて、どのようにしてロバをせしめてやろうか。」ジャッカルは四方の神々に祈りを捧げ「どうか薬の服用に差しさわりが生じませんように」と心の中で念じつつ、ロバの両耳と心臓を服用した。

⑪ ジャッカルは食い気を抑えきれず、これは素晴らしい薬だとばかりにロバの耳と心臓を自分で食ってしまった。

ライオンが（おそらくは）沐浴に出かけた後、どうすれば自分が鹿にありつけるかというジャッカル的心中描写。ヘルテル以外のテキストには、この (C) に相当する比較的長い心中描写は見られない。他のテキストはすべてはるかに簡潔で、エジャトンはこちらを採っている。「食い気を抑えきれずに」という語句は⑤⑥に見られるのみである。簡潔素朴をよいとするか、心理描写の巧みさを採るかは結局は好みの問題であろう。ライオンの従者の身分では食うことが許されないロバの美味な心臓と耳。ライオンとの関係の見直しを模索したり、食ってはみたいがいつ何時ライオンが戻ってくるかもしれない恐怖など、『タントラ・アーキアーイカ』では、そのあたりの葛藤が見方によればユー

モラスに描かれているように思われる。

エジャトンの復元テキスト⑪は、(A)の部分では、『タントラ・アーキアイカ』①にない部分を②～⑩に拠って補い、(C)の部分ではそれとは逆に、②～⑩にない部分を『タントラ・アーキアイカ』編纂者の創作とみなしたと考えられる。

IV ソーマデーヴァ『カター・サリット・サーガラ』⑦

11世紀カシミール地方の詩人ソーマデーヴァによる説話集『カター・サリット・サーガラ』(説話の川の海)の61 - 65章に取り入れられた『パンチャタントラ』の物語のなかの「心臓と耳のないロバ」63章125 - 150連。

森の一角に一匹のジャッカルを従えたライオンがいた。[16音節の欠落]ライオンはある時、狩りにやって来た領主の投げ槍を受けて傷を負うが、生命はどうかとめ洞穴に逃げ込んだ。しかし領主が立ち去ったあと、ライオンは食べるものもなく衰弱していった。ライオンの餌食の残りにありついて生きてきた従者のジャッカルは言った。「外に出て行って力の限り獲物を探してはいかがでしょうか。あなたの体はすっかり私と同じように弱ってしまったではありませんか。」ライオンはジャッカルに答えて言った。「なあ、おまえ。私は傷が疼いてどこにも行くことができないのだ。ロバの耳と心臓を食うことができたなら、傷は治り私はもとの元気を取り戻せる。さあ、すぐにでもロバをどこかから連れて来てくれ。」ライオンにこう言われて、ジャッカルは「わかりました」と答えてその場を去った。

水辺を歩いていた時、ジャッカルは洗濯屋のロバを見つけた。そこで親切を装って話しかける。「そんなにやつれてどうしたのです?」「重い洗濯物をずっと運んできたからです。」こう答えるロバにジャッカルは言った。「どうしてこんな苦しみを背負う必要がありますでしょうか? さあ、雌ロバと楽しめる楽園の森へあなたを連れて行ってあげましょう。」これを聞き、「是非そうしてくれ」とロバは楽しみに胸躍らせて答えた。

ジャッカルとともにたどり着いたのはあのライオンの森だった。ライオンはロバを見るや、その背後から近づいて鉤爪の一撃を食らわせる。ところが衰弱しきって息を切らしたライオンに力はない。ロバは睨まれて震えあがったが素早く身をかわして逃げ出す。ライオンはロバを捉えることにしくじり地に落ちて落胆。目的を果たせずそそくさと自分の洞穴に戻った。すると従者のジャッカルはライオンをなじって言った。「王様、こんな哀れなロバさえ倒すことができないのなら、カモシカなどはとても無理でしょう。」これを聞いてライオンは、「それが分かっているのなら、もう一度ロバを連れてこい。すぐに態勢を整え倒してみせよう。」こうしてライオンは再びジャッカルを送り出した。

ロバのところへやってくると、ジャッカルは尋ねた。「あなたはどのようにして逃げてしまったのです。」「私はあそこで得体のしれない何者かに襲われたのです。」そう言うロバをジャッカルは笑い飛ばした。「ありもしない幻でも見たのです。あそこにそんなものはいません。私はそこに住んでいますが、ほら、このようになんともないのですから。さあ、私と一緒にあの森の楽園へ戻りましょう。」

この言葉に惑わされてロバは再び戻って行った。ロバがやって来たのを見ると、洞穴の中から出てきた百獣の王は、背後からロバを襲って鉤爪で倒した。それからロバの屍を引き裂いて分け、ジャッカルをその見張りに立てると、疲れを癒しに沐浴に行った。その間に知恵が働くジャッカルは、ロバの心臓と耳を心ゆくまで堪能したのであった。

沐浴を終えて戻って来たライオンは、ロバの様子が違っているのに気づいた。「こいつの心臓と耳はどこだ。」尋ねられてジャッカルは答えた。「王さま、もともと心臓も耳もなかったのです。そうでなければ、どうして奴は逃げ去ったのに戻ってきたりするでしょう。」それを聞いてライオンはそれもそうだと考え、耳と心臓のないロバの肉を食らい、ジャッカルもまたその残りにありついたのである。

V バブリオス

1世紀ころ小アジアに住んだらしいギリシア化したローマ人と考えられ、イソップ寓話を跛行イアンボスという詩形で綴ったギリシア語の140編余の詩が伝わる。「病気のライオンと狐と鹿」(心臓のない鹿)の話はその中でも特に長い詩である。[]内は訳出上の補い。

ライオンが病気にかかり岩の裂け目のねぐらで力なく前足を投げ出して横たわっていた。ライオンには共に過ごす親しい狐がいる。ある時「わしに長生きしてほしいと思うなら」と、ライオンはためらいがちに切り出した。「ひとつおまえに頼みがある。いやなに他でもない。あの雑木林の老松の根っここのところに鹿が一匹住んでいるのは知っておろう。わしはこいつが食いたくてたまらない。だがこのとおり鹿を狩る力はわしにはもうない。どうかおまえのその蜜のように甘い言葉で奴めを狩りの餌食にしてはくれまいか、わしの手が届く所へ連れてきて欲しいのじゃ。」狐は出かけていった。雑木林のなか柔らかな草のうえを鹿が飛び回っている。会釈して挨拶をかわすと狐は弁舌もさわやかに、「あなたにとっても素晴らしいニュースです。ご存知かもしれませんが、私の隣人のライオンは加減が悪く、死期もすぐそこに迫っています。そこで動物の王の跡継ぎは誰がよかろうかと、ライオンはあれこれ思案に暮れているのです。猪は無鉄砲だし、熊のやつはのろまだ、豹は気が短かく、虎は自尊心が強い。ここは鹿を王にするのが一番よかろうと。容姿は端麗、それに長命ときている、その角は地を這う生き物の脅威的見事な木の枝ぶりにも似て、牛の角など比ではない。さあ、もうこれ以上申し上げる必要はないでしょう、あなたを動物の支配者にとライオンは望んでいます。あなたが王者となった暁には思い出してください、一番先に朗報をあなたに告げた私のことを。さあ伝令の務めは果たしました。これにてご免。もうライオンのもとへ戻らねばなりません。私のことを探しているかもしれないのです。いろいろあれこれ相談に乗っているものですから。そうだ、いちどあなたも一緒に来てはどうです。この年寄りの言うことを聞いてみては——ライオンのところへ行って側に付き添い病人を励まし元気づけてやってはどうです。最期の時を待つ者はわずかなことにも心動かされ、末期を迎えた者の瞳には魂が写ると言います。」智略に富む狐の長広舌は終わった。この作り言で鹿は期待に胸を膨らませた。向かったのは獣の洞穴、何が起きるかはつゆ知らず。臥せていたライオンが夢中で跳びかかる、その鉤爪の先が引きちぎったのは鹿の耳のみ。急いで事は仕損じるといのではないか。鹿は洞穴を抜け出して一目散に森のなか。

知恵を絞ったかいもなく計画は水の泡と消えて狐は憤懣やるかたなく手をこまねくばかり。ライオンは飢えと悔しさで胃を引きつらせ溜息をついたり呻き声をあげたり。やがてふたたび真顔で狐に頼んでこう言った。「もういちどだけ餌食を捉える罠を考えてくれ。」狐はしばらくじっと思案していたが、「難しいことをお命じですが、仰せのとおり。」ありとあらゆるたくらみを思い描きながら狐は獵犬のように足跡をたどって行った。途中で羊飼いに会おうとそのたびごとに尋ねる、血を流した鹿がどこかへ逃げていかなかったかと。目撃した羊飼いは誰もが指さして道を教えた。やがてついに狐は見つけた。木陰で走り疲れて弾む息を静かに整えている鹿を。厚顔無恥の狐がそしらぬふりで立ち止まるとたちまち鹿の背筋は凍り脚は震えはじめる。「近寄ってきて内緒話でもしようというのか。いやな野郎め、さっさと帰ってくれ。罠にかけるつもりなら、何も知らない奴にしろ。選んで王位につけるのは他の奴にするがいい。」狐はそれでも怯むことなく、相手の話をさげきって「なんと情けないことを。それほど怖いのですか。それほどまでに友を疑っているのですか。ライオンはあなたに有益な助言をしようとした。あなたがぐずぐずしているから、しびれを切らして耳に触れたのです——いまわの際の父親のようにありとあらゆる訓戒をあなたに伝えておこうと。国を治めていく者が守らねばならぬ教えです。弱々しい手で触れられることさえ我慢がならず逃げ出したためにあなたはかえって傷を負った。憤慨しているのはあなたよりもライオンのほうです。あなたがとても信用できない軽率な輩だと知って狼を王にしようとライオンは言っているのですよ。もしも暴君が王になったら——さあ、どうします。われわれ皆の災厄の責任はあなたに向けられる。さあ、来て。これからは堂々と振る舞うのです。群れからはぐれた羊のように怖がってはいけません。あなたの他に誰も私の主人になることがないように木々の葉と泉の流れに誓って申し上げましょう、ライオンに敵意はなく、あなたに好意を抱きあなたをあらゆる動物の王にと願っているのです。」こう滔々と喋りながら狐は子鹿を説得して、同じ鹿を二度までも冥府のなかへ引きずり込んだ。ライオンはねぐらの奥へ籠り一人っきりの晩餐に、肉を食い裂き、骨の髄を啜り、内臓を貪る。その傍らで狐はうらめしそうに佇んでいた餌食を連れてきたのはこの俺なのに——

ふと鹿の心臓がこぼれ落ちる
 狐はライオンの目を盗んですかさず失敬、
 自分は良い働きをした、その褒美だとばかりに
 舌なめずりしてからじっくり堪能したのだった。
 ライオンは一つ一つ内臓を検分したが
 洞穴のなか、寝床の隅々までさがしてみても

肝心の心臓だけはみつからない。
 智略に富む狐は真実を隠して言った、
 「もともと心臓などなかったのです。探しても無駄。
 一度ならず二度までもライオンの洞穴に来るなど、
 [強心臓というよりは考えのない無心の草木。]」

Ⅵ 跛行イアンボスとシュローカ (韻律について)

ここではバブリオスとソーマデーヴァのこの寓話の韻律を比較も交えて検討する。バブリオスのこの寓話は1行標準12音節で全102行。音節数は $(12 \times 102) + 13 = 1237$ 音節。13音は1長音節が2短音節と代替。ソーマデーヴァのほうは1連32音節で全26連。音節数は $(32 \times 26) - 16 = 916$ 音節。16音節はテキスト欠落。量的には三分の一程度バブリオスが多いが、これはおもに鹿を説得する狐の弁舌が長いことによる。全体の統計については後で触れることにする。ここではまず話の結末部に焦点をあてて、それぞれの韻律の基本事項も含めやや詳しく述べる。とりあげるのは、いずれも最後のライオンとジャッカル(狐)のやりとりの部分で、バブリオスでは10行半、ソーマデーヴァは4連である。

(1) 跛行イアンボス

バブリオスの詩句の韻律は跛行イアンボスと呼ばれる。短音節をVで、長音節を一で、長短どちらでもよい音節をXで表す。基本的に短母音を含めば短音節、長母音・二重母音を含めば長音節、短母音に子音が複数続くときには長音節と考える。イアンボスという脚はV-である。これを2回繰り返したも単位をメトロソと称する。イアンボスの場合、その最初の音節は長短自由とするのでX-V-となる。これを3回繰り返したものが、イアンボス・トリメトロソで(以下トリメトロソと略)、特にギリシア悲劇の台詞部分の韻律として知られる。ただし行末の音節は息継ぎを想定して短音節であっても長音節扱いにする。それぞれの基本的な音節の位置をposition(位)と呼び、これに番号を振ってトリメトロソの音節の長短を記せば以下ようになる。¹¹

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
x	-	v	-	x	-	v	-	x	-	v	-

その亜種とも言うべきものが跛行イアンボスで、第11位を長音節とする。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
x	-	v	-	x	-	v	-	x	-	-	-

両者ともに第5位か(および)第7位の後に単語の切れ目が来る。これをカエスラ(caesura)と呼ぶ。また時に長音節(ないし長短自由)のpositionが二つの短音節で占められることがあり、これをレゾリューション(resolution)という。第5位の後にある程度の意味のまとまりをなして切れる行を今仮りに5句切れと呼び、同じく第7位の後のものを7句切れと呼ぶ。両箇所で見られる場合は、詩句の意味上の切れが大きいほうを優先する。悲劇詩人エウリピデスのトリメトロソの場合、5句切れは70%を超える。¹²

バブリオスの寓話95番「心臓のない鹿」で狐が鹿の心臓を食う場面で末尾の10行半(92-102)。

ἡ δ' ἀγωγὸς εἰστήκει πεινώσα θήρης, καρδίην δὲ νεβρείην λάπτει, πεσοῦσαν ἀρπάσασα λαθραίως, καὶ τοῦτο κέρδος εἶχεν ὄν ἐκεκμήκει. λέων δ' ἕκαστον ἐγκάτων ἀριθμῆσας μόνην ἀπ' ἄλλων καρδίην ἐπεζῆται, καὶ πᾶσαν εὐνήν, πάντα δ' οἶκον ἡρεῦνα. κερδὼ δ' ἀπαιολῶσα τῆς ἀληθείης, “οὐκ εἶχε πάντως” φησὶ “μὴ μάτην ζῆται. ποίην δ' ἔμελλε καρδίην ἔχειν, ἥτις ἐκ δευτέρου λέοντος ἦλθεν εἰς οἴκους;”	hē d' agōgos heistēkei peinōsa thērēs, kardiēn de nebreiēn laptei, pesūsan harpasāsa lathraiōs, kai tūto kerdos eikhēn hōn ekekmēkei. leōn d' hekaston enkatōn arithmēsas monēn ap' allōn kardiēn epezētai, kai pāsan eunēn panta d' oikon ēreunā. kerdō d' apaiolōsa tēs alētheiēs, “ūk eikhe pantōs” phēsi “mē matēn zētai. poiēn d' emelle kardiēn ekhein, hētis ek deuterū leontos ēlthen eis oikūs	/ - v - v - - - - - v - - / - v - v - - - - - v - v / - v - v - - - - - v - v - v / - v - - - v - v - v / - v - v - - - v - v - - / - v - v - - - - - v - - / - v - v - - - - - v - v - v / - v - - - - - v - - - v / - v - - - - - v - v / - v - v - - - - - v - v - v / - v - - -
--	---	---

(χはchではなくkhで転写し、長母音はすべてマクロンをつけた)

その傍らで狐はうらめしそうに佇んでいた / 餌食を連れてきたのはこの俺なのに—— / ふと鹿の心臓がこぼれ落ちる / 狐はライオンの目を盗んですかさず失敬、 / 自分は良い働きをした、その褒美だとばかりに / 舌なめずりしてからじっくり堪能したのだった。 / ライオンは一つ一つ内臓を検分したが / 洞穴のなか、寝床の隅々までさがしてみても / 肝心の心臓だけはみつからない。 / 智略に富む狐は真実を隠して言った、 / 「もともと心臓などなかったのです。探しても無駄。 / 一度ならず二度までもライオンの洞穴に来るなど、 / [強心臓というよりは考えのない無心の草木。]

このようにして **Barbius 95** 全体を分析した結果が以下の表である。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
⑤	5	5	⑤	⑤	5	5	⑤	5	⑤	⑤	5	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	5	⑤	⑤
	⑦	⑦		7	⑦	⑦	7	⑦	7		⑦		7	7		7		7		7	7		⑦		
				4短短		6短短					2短短		1短短						1短短		4短短				
27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
5	5	⑤	⑤	5	⑤	⑤	⑤	5	⑤	5	⑤	⑤	⑤	⑤	5	⑤	5	5	5	⑤	⑤	5	⑤	⑤	⑤
7	⑦				7			7	⑦	7	⑦	7			7	7		⑦	⑦	7			⑦		
					1短短																		1短短		
53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78
⑤	⑤	⑤	⑤		⑤		⑤	⑤	⑤	⑤		⑤	5	5	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤		⑤	⑤	⑤
				⑦		⑦			7		⑦		⑦	⑦					7		7	⑦	7		
	4短短					1短短						4短短													1短短
79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102		
⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	5	⑤		⑤	⑤	5	⑤	⑤	⑤	⑤	5	⑤	⑤	⑤			5	⑤		
		7	7	7		⑦		⑦	7		7					⑦			7	⑦	⑦		⑦		
			6短短			4短短																			

表で1段目は **Barbius 95** の行数。2, 3段目は5句切れ (=⑤) と7句切れ (=⑦) の有無。⑤は第5位の後に語の切れ目はあるが第7位の後にはない場合(第1行)、または意味の上での切れ目が第5位の後のほうが第7位の後よりも大きい場合(第5行)。これをここで5句切れと呼ぶ。⑦はその逆で、第7位の後に語の切れ目はあるが第5位の後にはない場合(第57行)、または意味の上での切れ目が第7位の後のほうが第5位の後よりも大きい場合(第2行)。これをここで7句切れと呼ぶ。意味の上での切れ目の大きさが判断ができない場合には丸のない5・7(第31行)としたが、これは例えば、31行目の場合6・7位に2音節の呼びかけの語が入る場合など。レゾリューションがある行は、その **position** を数字で示して短短と記す(第5行)。

結果として、5句切れは71行、7句切れは25行。どちらとも判断しかねるのが6行。レゾリューションは102行のうち14回。判断しかねる場合も含めて言い換えるならば、5句切れは70 - 75%を占めるので、これを標準形とし、25 - 29%を占める7句切れはヴァリエーションと考えるがよいと思われる。これらは先に挙げたエウリピデスのトリメトロスの場合と同じと考えてよい数値である。レゾリューションについても比較の仕方によるが、そう大差はないと言えるだろう。

跛行イアンボスがトリメトロスと異なるのは、第11位が長音節となることだけのように見える。ただしその影響は他にも及んで、かなり大きな違いを生み出しているように思われる。つまり、第11位が長音節で固定した場合に、本来自由な第9位もさらに長音節になると、長音の5連続が生じることになる。これは韻律上まず避けられそうである。1行12音節の詩句で、行末が5連続長音節となると単調さは免れない。したがって第9位は短音節になる傾向が強いはずである。そうだとすれば5句切れの後に続くこの部分は **-v-v---** というパターン(92 - 102行の網掛け部分)で固定してしまうと予想される。実際調べてみると、一か所だけ不明の箇所を除きすべてこのパターンである。¹³

会話に近いリズムだとされるトリメトロスは、割合に自由がきく韻律である。これに対し跛行イアンボスは、以上のことを考えると、かなり制限された韻律のようにも思える。とはいえ、これは机上の空論かもしれない。全体の7割強を占める5句切れは、このように後半部が固定するが、最初の5音はある程度自由がある。また全体の3割ほどを占める7句切れがヴァリエーションになる。こうした韻律表記には現れないアクセントの現れはまた多様であろう。長短のリズムが比較的単純だとしても、朗読の仕方により、またメロディーの要素として様々な高低のアクセントが加われば、千変万化ということになるのかもしれない。なおバブリオスの跛行イアンボスは、ラテン語の影響があるらしく第11位には必ずアクセントがある。

(2) シュローカ

音節の長短の扱いについては上で述べたギリシアの音節の扱いと驚くほど一致するので、これに準じて考える。トリメトロスや跛行イアンボスが標準 12 音節で 1 行をなすのに対し、シュローカは 32 音節で 1 連をなす。1 連の音節数が多いので、混同が生じないようにここで少し長くなるが用語について規定しておく。下の図版および韻律図解で || が連の区切りである。verse, stanza, スタンザ、節、連という呼び方がされるようであるが、ここでは連とする。連を半分に分けたものを half-verse ないし hemistich という。ここでは hemistich という用語を用いる。hemistich は 16 音節である。連の内部におけるその区切りは | で表す。hemistich を半分に分けたものは quarter-verse, metrical line, pāda などと呼ばれるが、ここでは pāda を用いる。pāda は 8 音節である。下の韻律図解では斜め線 / で pāda を区切った。また便宜的に 1 連のなかの 4 つの pāda にそれぞれ a,b,c,d を振り、奇数 pāda は a と c、偶数 pāda は b と d とする。さらに pāda を二分したものを pāda の前半、後半と呼ぶことにする。これはそれぞれ 4 音節になり、西洋の韻律用語では脚 (foot) ないしメτροン (metron) がこれに近いと思われる。本稿では混同を避けるため line, verse, foot の語は用いない。

下記の韻律図解のように、シュローカの hemistich は $v - v -$ で終わる。言い換えれば偶数 pāda (b, d) の後半部は $v - v -$ となる。pathyā と呼ばれる標準形 (正規形) は奇数 pāda (a, c) の後半部が $v - - -$ であり、全体の 8 割以上を占める。奇数 pāda (a, c) の後半がそうならないものは (例えば $v v v -$) vipulā と呼ばれるヴァリエーション (拡張形) である。各 pāda の前半部はある程度の制約はあるが基本的に自由である。

pāda は多くの場合カエスーラで区切られる。上のトリメトロスの箇所 で用いたのとほぼ同じ意味でのカエスーラである。単語の切れ目であるが、しばしばある程度の意味の切れ目でもある。合成語の場合はその内部も可か。pāda という用語があれば hemistich という語は不要に思えるが、奇数 pāda と偶数 pāda はそれぞれ後半分が対称をなすので hemistich という語があったほうが便利である。1 連のなかの 2 つの hemistich は同じ性格のものであるから、あえて連という単位を想定しなくてもよいように思われるが、詩句の意味のまとまりということであろうか、hemistich と連との関係はセミコロンとピリオドの関係のようなものかと思われる。

次のデーヴァナーガリー文字とラテン文字転写の部分は「心臓と耳がないロバ」でジャッカルがロバの心臓と耳を食う場面で最後の 4 連である。4 連 = 8 hemistichs = 16 pādas = 128 音節となる。またその次の表は「心臓と耳がないロバ」全体の音節の長短を表したものである。これは 25.5 連 = 51 hemistichs = 102 pādas = 812 音節となる。

『カター・サリット・サーガラ』でジャッカルがロバの心臓を食う場面。第 147 - 150 連。

तत्कालं जम्बुकस्तस्य स मायावी खरस्य तत् । भक्षयामास हृदयं कर्णौ चाप्यात्मतृप्तये ॥	१४७
स्नात्वागतस्तथाभूतं तं दृष्ट्वा गर्दभं हरिः । क कर्णौ हृदयं चास्येत्यपृच्छत्तं च जम्बुकम् ॥	१४८
जम्बुकः सोऽप्यवादीत्तमकर्णहृदयः प्रभो । प्रागेवासीत्कथं गत्वाप्यागच्छेदन्यथा ह्ययम् ॥	१४९
तच्छ्रुत्वा स तथैवैतन्मत्वा केसर्यभक्षयत् । तन्मांसमन्यत्तच्छेषं जम्बुकोऽपि चखाद् सः ॥	१५०

tatkālaṃ jambukas tasya / sa māyāvī kharasya tat	- - - - v - - - - / v - - - - v - v -	147ab
bhakṣayām āsa ḥṛdayaṃ / kaṛṇau cāpy ātmatṛptayē	- v - - v v v - / - - - - v - v -	147cd
snātvāgatas tathābhūtaṃ / taṃ dṛṣṭvā gardabhaṃ hariḥ	- - v - v - - - / - - - - v - v -	148ab
kva kaṛṇau ḥṛdayaṃ cāsyēty / aprcchat taṃ ca jambukam	v - - v v - - - / v - - - v - v -	148cd
jambukaḥ sō 'pi avādīt taṃ / akarṇaḥṛdayaḥ prabhō	- v - - v - - - / v - v v v - v -	149ab
prāg ēvāsīt kathaṃ gatvāpy / āgacchēd anyathā hy ayam	- - - - v - - - / - - - - v - v -	149cd
tac chrutvā sa tathāivaitan / mantvā kēsary abhakṣayat	- - - v v - - - / - - - - v - v -	150ab
tanmāṃsam anyat tac chēṣaṃ / jambukō 'pi cakhāda saḥ	- - v - - - - - / - v - v v - v -	150cd

(pāda の最後の音節はすべて長音節として表記した)

その間に知恵が働くジャッカルは、ロバの心臓と耳を心ゆくまで堪能したのであった。沐浴を終えて戻って来たライオンは、ロバの様子が違っているのに気づいた。「こいつの心臓と耳はどこだ。」尋ねられてジャッカルは

答えた。「王さま、もともと心臓も耳もなかったのです。そうでなければ、どうして奴は逃げ帰ったのに戻ってきたりするでしょう。」それを聞いてライオンはそれもそうだと考え、耳と心臓のないロバの肉を食らい、ジャッカルもまたその残りにありついたのである。でしょう。」それを聞いてライオンはそれもそうだと考え、耳と心臓のないロバの肉を食らい、ジャッカルもまたその残りにありついたのである。

網掛けで示した奇数 pāda の後半がほぼ $v - - -$ となるのに対して、偶数 pāda はすべて $v - v -$ である。一つの hemistich のなかでのこの両者が大きなコントラストをなし、その交替が連続と続くことになる。これを解説してある文書には 'The syncopation at the end of the first and third pādas gives a feeling of suspense which is resolved at the end of each half-verse' とある。なお上の奇数 pāda の後半で網掛けとなっていない 147c と 150c は、以下で述べるヴァリエーション（拡張形）である。

『カター・サリット・サーガラ』KSS. 63:125-150「心臓と耳のないロバ」の短長音節の分布（vは短音節、-は長音節）125cd 欠。

		1	2	3	4	5	6	7	8		1	2	3	4	5	6	7	8		1	2	3	4	5	6	7	8															
125	ab	-	-	-	-	V	V	V	-	-	-	-	V	V	-	V	-	V	-	138	ab	-	-	V	-	V	-	-	V	V	-	-	V	-	V	-						
125	cd																			138	cd	V	-	-	-	V	-	-	-	-	V	-	V	-	V	-						
126	ab	V	-	-	-	V	-	-	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	139	ab	V	V	-	-	V	-	-	V	-	-	V	-	V	-	V	-						
126	cd	-	V	-	-	V	-	-	-	-	V	V	V	V	V	-	V	-	139	cd	V	V	-	V	V	-	-	-	V	V	V	V	-	V	-	V	-					
127	ab	-	-	V	-	V	-	-	-	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	140	ab	-	-	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	V	-	V	-					
127	cd	-	-	-	V	V	-	-	-	-	-	-	V	-	-	-	-	-	140	cd	V	-	V	V	V	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-						
128	ab	-	-	V	-	V	-	-	-	-	-	-	V	-	-	V	-	V	-	141	ab	V	V	-	-	V	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	V	-				
128	cd	-	-	-	V	V	-	-	-	-	V	-	V	V	V	V	-	V	-	141	cd	-	-	V	-	V	V	V	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-				
129	ab	-	-	-	V	V	-	-	-	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	142	ab	V	-	-	-	V	-	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	V	-			
129	cd	V	-	-	-	V	-	-	-	-	-	-	-	V	-	-	-	-	142	cd	-	V	-	-	V	-	-	-	V	-	V	V	V	-	V	-	V	-				
130	ab	V	-	V	-	V	V	V	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-	143	ab	-	-	V	-	V	-	-	V	-	-	-	V	-	-	V	-	V	-			
130	cd	-	-	V	-	V	-	-	-	-	V	V	-	-	-	V	-	V	-	143	cd	-	V	-	V	V	-	-	V	-	V	V	V	-	V	-	V	-	V	-		
131	ab	V	-	V	V	V	-	-	-	-	-	-	-	V	-	-	-	-	144	ab	V	-	-	V	V	-	-	-	-	V	-	V	-	V	-	V	-	V	-			
131	cd	-	-	-	-	V	-	-	-	-	V	V	-	V	V	-	V	-	144	cd	V	V	-	V	V	-	-	-	-	V	-	V	-	V	-	V	-	V	-			
132	ab	V	-	V	-	V	-	-	-	-	V	V	-	V	V	-	V	-	145	ab	-	V	-	-	V	-	-	V	-	-	V	-	V	-	V	-	V	-	V	-		
132	cd	-	-	-	-	V	-	-	-	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	145	cd	V	-	V	-	-	V	V	-	V	-	-	-	V	-	-	V	-	V	-		
133	ab	V	-	-	-	V	V	V	-	-	-	V	-	-	-	V	-	V	-	146	ab	V	-	V	-	V	-	-	-	V	-	-	-	V	-	-	V	-	V	-		
133	cd	-	-	V	-	-	V	V	-	-	V	V	-	V	V	-	V	-	146	cd	-	V	-	-	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-			
134	ab	V	V	-	V	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-	147	ab	-	-	-	-	V	-	-	V	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-	V	-	
134	cd	V	-	-	V	V	-	-	-	-	V	-	-	V	V	-	V	-	147	cd	-	V	-	-	V	V	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-		
135	ab	-	-	-	V	V	-	-	-	-	-	V	-	-	-	-	-	-	148	ab	-	-	V	-	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-		
135	cd	V	-	-	-	V	-	-	-	-	-	V	-	-	-	-	-	-	148	cd	V	-	-	V	V	-	-	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-	
136	ab	-	V	-	-	V	-	-	-	-	-	V	-	-	-	-	-	-	149	ab	-	V	-	-	V	-	-	V	-	V	V	V	-	V	-	V	-	V	-	V	-	
136	cd	-	-	V	-	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	149	cd	-	-	-	-	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-	
137	ab	V	-	V	-	V	-	-	-	-	V	-	V	V	V	-	V	-	150	ab	-	-	-	V	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-
137	cd	-	-	-	V	V	-	-	-	-	V	V	-	-	-	-	-	-	150	cd	-	-	V	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	-	V	-

左列の 125-150 は連。abcd はそれぞれ pāda。1-8 は各 pāda のなかでの音節の position（位）とする。各 pāda の最後である第 8 位はすべて長音節として表記した。pathyā と呼ばれる標準形（正規形）は奇数 pāda (a, c) の後半部が $v - - -$ である。奇数 pāda (a, c) の後半部がそうっていないのは vipulā と呼ばれるヴァリエーション（拡張形）である（125a, 130a, 133a, 133c, 141c, 145c, 147c, 150c）。各 pāda の前半部はある程度の制約はあるが基本的に自由である。2-8 位を網掛けにしてあるのは跛行イアンボスの標準形の行末と同じ構造 $-v-v-v-v-v-v-v$ になる箇所であるが、これについては次の章で述べる。

ヴァリエーション（拡張形）は 51 の hemistich のうち 8 つで 16% の割合である。これは参考にした A.Macdonell, *A Sanskrit Grammar for Students*, p.233f. が挙げている数値の 11% とほぼ同じとみなしてよいだろう。標準的なパターンとそこから逸脱するパターンの割合がこの程度の場合には、標準形と拡張形という呼び方がふさわしいと思われる。逸脱するパターンが 3～4 割にもなれば、二つの異なるパターンの交替と捉えるのが適切であろうし、逆に数パーセントならば例外的な扱いにすべきであろう。

(3) 跛行イアンボスとシュローカを比べて

跛行イアンボスでの 5 句切れは 70 - 75% であり、これを標準形とみなし、7 句切れがヴァリエーションとなって変化を生み出しているとの見方は可能であろう。いっぽうシュローカは、奇数 pāda 後半の $v - - -$ と偶数 pāda 後半の $v - v -$ の対称が——この寓話では 84% の割合で——連続と繰り返されるのを標準形として、奇数 pāda 後半で

v - - - とならないヴァリエーションが変化をもたらしているとみなすこともできるだろう。トリメトロスも跛行イアンボスもシュローカも、7割から8割を占める標準形にこうしたヴァリエーションが加わることで、単調さを回避しながら長大な詩行の繰り返しが可能になっているのではないかと考えられる。こうした柔軟でがっしりした骨格に、音節の長短のほかに高低のアクセントや息継ぎが肉付けされ、微妙な音の長さ・高さ・強さの限らないグラデーションが加わっていくのを想像するのもまた楽しい。

ところで、シュローカの奇数 pāda (a,c) の後半4音節は——標準形の場合に——跛行イアンボスの行末4音節 v - - - と同じであり、また偶数 pāda (b,d) の後半はトリメトロスの行末4音節 v - v - と同じである。跛行イアンボスはイアンボス・トリメトロスから派生して生まれたものであろうが、このギリシアの二つのイアンボス型は、サンスクリットのシュローカの原型と古い時代に共通の源をもっていたのではと想像させるものがある。¹⁴ また韻律のタイプとして、サンスクリットは長短音節を一定の規則に従って配列する akṣaracchandas と呼ばれるタイプと、音量 (mora) の数によって規定される mātrāchandas というタイプに分類されるという。ギリシア詩の場合に、悲劇のイアンボス・トリメトロスや歌謡・抒情詩のスタンザ形式のものが長短音節を一定の規則に従って並べるので、これは akṣaracchandas に対応する。またエレゲイア詩形——ペンタメトロスの後半部を除く——や叙事詩のヘクサメトロスはダクテュロス (長短短) がスポンダイオス (長長) と交替するので、これは mātrāchandas に対応する。ダブルスタンダードとでもいうべきこの二つの韻律タイプが両言語に共通するのは非常に興味深い。こうしたことを考えれば、次のような韻律の実験もあながち荒唐無稽とまでは言われなくてもいいかもしれない。

左列は『カター・サリット・サーガラ』の、右列はバブリオスの詩行である。ギリシア語とサンスクリットのこの二つの「寓話」詩の長短音節の割合はともにほぼ2:1である。また音節の扱いも短母音に子音が複数続けば位置により長音節とする点も共通し、跛行イアンボスの行末もシュローカ pāda の終わりの音節も長短は自由である。音韻も似て共に帯気音があり1子音扱いされる。

『カター・サリット・サーガラ』の51ある奇数 pāda (a,c) のうち、第2-8位が - v - v - - - となるのは10あり、それを左列に配する。第1位は括弧に入れる。バブリオスの102行のうち70-75%は5句切れである (レゾリューションは11行あるが、ほとんど全てが行の前半。一箇所だけ後半だが、7句切れなのでここでは関係しない)。したがって70行余りは詩行の後半である第6-12位が - v - v - - - となる。そのうち左列の『カター・サリット・サーガラ』の詩句と内容の点で近い箇所を選んで右列に並べてみる。行頭の数字はそれぞれ連ないし行の数字である。「心臓と耳がないロバ」のシュローカの奇数 pāda の2割と、「心臓がない鹿」の跛行イアンボスの7割が、- v - v - - - という同じ7音の韻律パターンを持つことになる。

127a (ta) tra sthitam gatē tasmin
(タ)トラ スティタン ガテー タスミン
(tat) ras thi tam ga tē tas min
- v - v - - -
その(王が)去ってからもそこにいた

128a (nir) gatya kiṃ yathāśakti
(ニル)ガティヤ キン ヤターシャクティ
(nir) gat ya kiṃ ya thā śak ti
- v - v - - -
なぜ外に出て力の限り

130c (tan) mē vraṇāni rōhanti
(タン)メー ウラナーニ ローハンティ
(tan) mē vra nā ni rō han ti
- v - v - - -
そうすれば私の傷は治る

1 en pharangi petraiē
エン ファランギ ペトライエー
en pha ran gi pet rai ē
- v - v - - -
岩の裂け目の洞穴に

4 ei theleis me sy zōein
エイ テレイス メ スツ ゴーエイン
ei the leis me sy zō ein
- v - v - - -
お前が私に生きていてほしいと望むなら

8 kheiras eis emās hēksei
ケイラス エイス エマース ヘークセイ
khei ra sei se mās hēk sei
- v - v - - -
私の手の届くところまで来るように

- 132a (bhra) mañ jalāntikē labdhvā
 (ブラ) マン ジャラーンティケー ラブドワー
 (bhra) mañ ja lān ti kē lab dhvā
 - v - v - - -
 流れのほとりを歩いていて出会った
- 136c (sim) hō dadau karāghātaṃ
 (シン) ホー ダダウ カラーガータン
 (sim) hō da dau ka rā ghā taṃ
 - v - v - - -
 ライオンは一発くらわせた
- 137a (sa) tēna vīkṣitas trastaḥ
 (サ) テーナ ウィークシタス トラストハ
 (sa) tē na vīk ṣi tas tras taḥ
 - v - v - - -
 ライオンに睨まれて震えあがり
- 138a (sim) has tv asiddhakāryaḥ svām
 (シン) ハス トワシッダカールヤハ スワーム
 (sim) hast va sid dha kār yaḥ svām
 - v - v - - -
 だが事をしくじったライオンは自分の(洞穴へ)
- 143a (mith) yaiva vibhramō dṛṣṭas
 (ミト) ヤイワ ウィブラモー ドリシュタス
 (mith) yai va vibh ra mō dṛṣ ṭas
 - v - v - - -
 幻でも見たのだ
- 146a (ni) kṛtya gardabhaṃ taṃ ca
 (ニ) クリトヤ ガルダバンタン チャ
 (ni) kṛt ya gar da bhaṃ taṃ ca
 - v - v - - -
 ロバを解体し終えると
- 148a (snāt) vāgatas tathābhūtaṃ
 (スナート) ワーガタス タターブータン
 (snāt) vā ga tas ta thā bhū taṃ
 - v - v - - -
 沐浴を終えて戻ってきてこのような有様の
- 11 malthakēs hyper poiēs
 マルタケース ヒュペル ポイエース
 mal tha kēs hy per poiēs
 - v - v - - -
 柔らかな草の上で
- 40 esparaksen akraiois
 エスパラクセン アクライオイス
 es pa rak se nak rai ois
 - v - v - - -
 (鉤爪の) 先で削いだ
- 42 ēgen eis mesās hylās
 エーゲン エイス メサーズ ヒューラーズ
 ē ge neis me sās hylās
 - v - v - - -
 森のなかへ(驚いて逃げた)
- 46 līmos eikhe kai lypē
 リーモス エイケ カイ リューペー
 lī mo sei khe kai lypē
 - v - v - - -
 飢えと痛みに(苦しんで)
- 68 tūs philūs hypopteueis
 トゥース フィルース ヒュポプテウエイズ
 tūs phi lūs hy pop teu eis
 - v - v - - -
 お前は友を疑うのか
- 90 eikhe daita panthoinēn
 エイケ ダイタ パントイネーン
 ei khe dai ta pan thoi nēn
 - v - v - - -
 素晴らしいご馳走を楽しんだ
- 93 kardiēn de nebreiēn
 カルディエーン デネブレイエーン
 kar di ēn de neb rei ēn
 - v - v - - -
 鹿の心臓を

(1行目は単語ごとに分ける。2行目はそのおおよその読みをカタカナで示す。3行目は単語の区切りを無視して音節ごとに分けたもの。子音が続く場合は適宜前後の音節に分散(行頭ではそのまま)。4行目は音節を長短で。なお左列でvは[w]としてカタカナ書きし、mは「ム」ではなく発音「ン」とした。いずれも子音扱い。対してrは母音。また右列でχはchではなくkhで転写。vは単母音の場合yで転写し円唇前舌狭母音[y]である。zは複子音扱い。また両列ともに帯気音kh, th, dh, ph, bhなどは単子音)

注

- 辻直四郎『サンスクリット文学史』岩波全書 1973. 158, 166-167 頁。
- F.Edgerton: The Panchatantra Reconstructed. 1924. Vol. 2. p. 48.

- 3 概略はおもに辻直四郎『サンスクリット文学史』1973と田中菟弥・上村勝彦訳『パンチャタントラ』大日本絵画1980による。
- 4 Die Fabel ist in allen alten Versionen mit Ausnahme von N und Hit erhalten. (R. Geib: Zur Frage nach der Urfassung des Pañcatantra, 1969. p.130.)
- 5 上掲邦訳『パンチャタントラ』363 – 368 頁に「心臓と耳がないロバ」は「愚かな驢馬」として。
- 6 C.Rajan による英訳 (Penguin Classics 2006, p. 369f.) で ‘Long Ears and Dusty’ として。
- 7 Kalila und Dimna, Syrisch und Deutsch von Friedrich Schulthess, Berlin 1911. II Übersetzung, S.80.
- 8 菊池淑子訳『カリーラとディムナ』(東洋文庫) 1978. 210 頁。
- 9 F.Edgerton, *ibid.* p.399.
- 10 Th.Benfey: *Pantschatantra*. 2 Bde. Leipzig, 1859. 第1部はインドの原典とその派生譚の伝播を論じ、序説と題されてはいるが600頁余り。第2部はドイツ語訳。ベンファイが用いた底本はいわゆる「小本」⑤で Kosegarten による校訂本の第1部(1848)。その第2部にあたる注解は1859刊で、ベンファイはこれを利用できなかった。邦訳『パンチャタントラ』は「小本」⑤ (Kielhorn&Bühler 校訂本) を底本とする。このセクションの最初の段落で、②⑩をはじめとするこの寓話を含む校訂本や翻訳が10ほど列挙されているが、今日では古いので訳出は省略。なおベンファイの頃にはまだ①は発見されておらず、先に挙げたエジャトンの系譜とは切り離して考えなければならない。以下の記述でサンスクリットの諸テキストというのは主に Kosegarten 校訂版⑤で用いられた10ばかりの写本を指すと思われる。また § 181 で、訳出した部分の後に、アラビア語版 [=「カリーラとディムナ」] ⑩以降のヨーロッパ諸語への翻訳・影響が述べられているがこれも訳出は省略。
- 11 なお短音節は通常 が用いられるが、本稿では文字入力の都合上 V を用いる。また長短どちらでもよい音節は X のほかに の記号が用いられる。
- 12 レゾリューションは、悲劇詩人アイスキュロスやソフォクレスの場合100行につき6回程度で、エウリピデスの場合作品により異なるが、これが最も頻度の高い『オレステス』の場合100行につき40回近くになる。カエスーラおよびレゾリューションについては C.M.J.Sicking, *Griechische Verslehre*, 1993. p. 90-97 によった。本稿でいう5句切れは、Sicking p.95f. における P-7, P+7 の行、7句切れは H-5, H+5 の行である。
- 13 その一箇所は29行目 $\pi\rho\acute{o}s\ t\acute{o}n\ \lambda\acute{\epsilon}o\nu\tau\alpha,\ \mu\acute{\eta}\ \pi\acute{\alpha}\lambda\iota\nu\ \mu\epsilon\ \zeta\eta\tau\acute{\iota}\sigma\eta$ 。ζは本来二重母音で、第97行では行末の語が $\acute{\epsilon}\pi\epsilon\zeta\acute{\iota}\tau\epsilon\iota$ で二重母音扱いになっている。しかし29行目、9位は短音節のはずだから、ここでζは単子音扱いと考えられる。両様の扱いが可能か。
- 14 cf. 拙訳:A. メイエ『印欧祖語に起源をもつギリシア詩の韻律』(1923) 第7章「イアンボス・トロカイオス(短長・長短)詩行」の訳と注。和歌山大学教育学部紀要—人文科学—第64集(2014). p.105ff.

本稿の校正段階で、ドイツ語については京都の松村朋彦さんに、サンスクリットについては同じく高橋健二さんに助言を受けた。至らぬ点はまだ多いと思うが筆者の責任である。